Special Essay

本質を捉え真の知的創造立国となるためには

外科学講座小児外科部門
八木　実

いまひとつ元気のない日本。熱しやすく冷めやすい国民性もあるかもしれないが何だかおかしい。「ゆとり教育」と金科玉条のごとく語られ自由の意味も履き違えて、時間がたってみれば学生の質は低下してきているという。更に、「国際化には英語」と題し、小学生から英語を教えるようになってきている。一国の国語力も未熟なうちから少しでも早くから慣れさせるだけと言う観点から英語を学ぶのはいかがなものだろうか。今、我々が用いる英語とは考えた内容を国内外に伝える手段に過ぎない。やはりその根底にあるのはその内容であり、その厚みを増すことに対する努力は十分にされているのであろうか。日本語の本を読ませ、日本の歴史や伝統文化を摺り込むように教える。ＩＴ化の大義名分のもと、パソコンやゲーム機のモニターから字を読むのでなく、印刷物から活字を読む習慣を定着させ、読書文化を復活させる。深い内容の文章を作る訓練をする。何が本物なのか、どういったことが正しいのかが、おのずと学習されてくるのではないであろうか。その結果、確固たる信条のもと現代の人間に必要な付加価値の高いものづくりといった、マネーゲームでない真の意味で国力を上げる方向性を目指すことが可能になるのではないだろうか。単純に表現する手段を重点的に学ぶより表現する内容のレベルアップを目指す。これが地に足がついた真の国際人を作る正統派の手法ではなかろうか。更に、指導者は個々にこのように育てられた人々の更なる能力を引き出すことも重要であると考える。道元は「愛語よく回天の力あり」と言った。天下国家を思う気持ちから出た言葉は天下の形勢を一変させる力があるという。天下国家のレベルだけでなく個人のレベルにおいてもあてはまる。その人を拝み、その人を思う気持ちから出た真実の言葉は、その人を本当にやる気にさせる。愛語とは人を褒めることを意味する。褒めることは我々が通常、捉えている以上に指導者が率いる人たちの能力を引き出すパワーがあると推定される。しかし、短期間で成果は望めないから10年単位で物事を考えるべきであろう。　将来、真の知的創造立国となるために本質を捉え確固たる信条を持てるような国語教育を行い、実際の仕事や研究で褒めて夢を持たせ、損得抜きで物事に没頭できる人材を育成することが重要である。今、改めてそう思う今日この頃である。